TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★☆☆ ふつう 890語

# Phaethon

## パエトン

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 太陽の神ヘリオスのむすこパエトンは、たった一日だけ太陽の車を走らせたいとねがいます。お父さんは止めますが……。



Phaethon was the son of Helios, who drove the chariot of the sun. He lived with his mother, the gentle Clymene, in a beautiful valley in the east.

One day when Phaethon was telling his companions about his father, the sky king, they laughed and said, “How do you know that Helios is your father? You have never seen him. If, as you say, he cannot safely come nearer to the earth, why do you not sometimes go to his land.”

Phaethon answered, “My father’s throne is far away from this valley. My mother has promised that when I am stronger, I shall go to my father’s palace. I often watch his golden chariot roll by in its path and think perhaps some day I shall drive the glorious horses of the sun.

“I shall go now to my mother, and ask her how much longer I must wait.”

When Phaethon told his mother what his companions had said she answered, “Go, my child, ask Great Helios if you are his son. If you are worthy to be the son of Helios you will be given strength and courage for the journey.”

Phaethon gladly and bravely climbed the unused path which led to the palace of the sun.

At last he came in sight of the throne. He had never seen anything so beautiful. On one side were standing the days, months and the old years. On the other side were the seasons; Spring, covered with flowers; Summer, with her baskets of fruit and grain; Autumn, in a many-colored dress; and Young Winter, with a crown of icicles.

As Phaethon came nearer to the throne, the light was greater than his eyes could bear. Its wonderful colors dazzled him.

Helios saw the brave youth and knew that it was Phaethon, his son. He took his glittering crown from his head and went forward to meet him.

Phaethon cried, “Great Helios, if you are my father give me and others proof that it is so.”

Helios took him in his arms and kissed him. “You are indeed my son,” he said. “I will put an end to your doubts. Ask any gift you will, and it shall be yours.”

Phaethon had always had one wish in his heart and said, “O, my father, let me drive the wonderful golden chariot of the sun for just one day.”

Helios shook his head sadly and said, “That is the one thing which you must not ask to do.

“You are my son, and I love you. For your own sake, I cannot let you do this. You have neither the strength nor the wisdom for the great work.

“The first part of the way is very steep and rugged. In the middle part, even I dare not look below at the far stretching earth, and the last part is full of terrible dangers.”

Phaethon would not listen, but threw his arms around his father’s neck and begged to go.

Helios said at last, “If you persist, foolish boy, you shall have your wish, for I cannot break my promise. I beg of you choose more wisely. Ask the most precious thing on earth or in the sky, and you shall have it.”

Already Dawn had drawn back the purple curtains of the morning and the Hours were harnessing the horses to the chariot.

The stars and moon were retiring for the day.

The chariot glittered with jewels which sent the light in all directions. Phaethon looked upon it with delight and longed impatiently for the great joy of driving it.

Helios said, “O, my dear son, go not too high or you will scorch the dwelling of heaven, nor too low, lest you set the world on fire.

“Keep the middle path; that is best, and do not use the whip; rather, hold the horses in.”

Phaethon was too happy to hear what his father was saying.

He leapt into the golden chariot and stood erect as the fiery horses sprang forth from the eastern gates of Day.

They soon missed the strong steady hand of their master.

Up, up they went, far into the sky, above the stars, and then plunged downward toward the earth.

The clouds smoked, the mountain tops caught fire, many rivers dried up and whole countries became deserts.

Great cities were burning, and even Poseidon cried out in terror from the sea.

Then the people on earth learned with what great wisdom the path of the sun was planned.

Helios saw that the whole world would soon be on fire, and cried to father Zeus to save the earth from the flames.

Zeus searched all the heavens for clouds and hurled his thunderbolts from the sky.

Phaethon fell from the chariot, down, down into a clear river.

The naiads cooled his burning brow, and gently sang him to sleep.

His sisters came to the banks of the river and wept.

That they might be always near Phaethon, Zeus, in pity changed them into poplar trees, and their tears became clear amber as they fell into the water.

At last the tired horses became quiet, and the great car rolled slowly back into its old path.

But the deserts and barren mountain tops still tell the story of the day Phaethon tried to drive the chariot of the sun.

## 和訳 パエトン（Phaethon）

パエトンは、太陽の車を走らせるヘリオスのむすこでした。パエトンは、やさしいお母さんのクリュメネと、東の国の美しい谷でくらしていました。

ある日、パエトンが友だちに、空の王であるお父さんの話をしていると、友だちはわらって言いました。「ヘリオスがきみのお父さんだって、どうしてわかるんだい？一度も会ったことがないじゃないか。きみの言うように、お父さんがあぶなくて地上に近づけないのなら、どうしてときどき、きみのほうからお父さんの国へ行かないんだい？」

パエトンは答えました。「お父さんの王ざは、この谷からずっと遠い所にあるんだ。ぼくがもっと強くなったら、お父さんの宮でんに行かせてくれると、お母さんがやくそくしてくれたんだ。ぼくはよく、お父さんの金の車が道を走っていくのをながめては、いつかぼくも太陽のすばらしい馬を走らせるんだと思っているんだ。

「今からお母さんの所へ行って、あとどのくらい待たなければいけないのか聞いてくるよ。」

パエトンが友だちに言われたことを話すと、お母さんは答えました。「お行きなさい、ぼうや。自分がむすこかどうか、えらいヘリオスさまに聞いてくるのです。あなたがヘリオスのむすこにふさわしいなら、旅をする力とゆう気をあたえられるでしょう。」

パエトンはよろこんで、いさましく、太陽の宮でんへつづく、だれも通らない道をのぼっていきました。

とうとう王ざが見えてきました。パエトンは、こんなに美しいものを見たことがありませんでした。かたがわには、日や月や、年をとった年たちが立っていました。もうかたがわには、きせつたちがいました。花にうずもれた春、くだものや麦のかごを持った夏、いろいろな色の服を着た秋、それに、つららのかんむりをかぶったわかい冬です。

王ざに近づくと、光はパエトンの目にはまぶしすぎて、たえられないほどになりました。そのすばらしい色に、パエトンは目がくらみました。

ヘリオスは、ゆうかんなわか者を見て、それがむすこのパエトンだとわかりました。ヘリオスは頭からかがやくかんむりをはずし、前に進んでむかえに行きました。

パエトンはさけびました。「えらいヘリオスさま、もしあなたがぼくのお父さんなら、ぼくとみんなに、そのしょうこを見せてください。」

ヘリオスはパエトンをだきしめて、キスをしました。「おまえは本当にわたしのむすこだ」とヘリオスは言いました。「おまえのうたがいを晴らしてやろう。何でもほしいものを言いなさい。それをおまえにあげよう。」

パエトンは、ずっと心に一つのねがいを持っていたので、こう言いました。「ああ、お父さん、たった一日でいいから、太陽のすばらしい金の車を走らせてください。」

ヘリオスは悲しそうに首をふって言いました。「それだけは、たのんではいけないことなのだ。

「おまえはわたしのむすこで、わたしはおまえをあいしている。おまえのためを思うからこそ、それはさせられないのだ。おまえには、この大仕事をするだけの力もちえもない。

「道のはじめはとても急で、でこぼこだ。まん中では、わたしでさえ、はるか下に広がる地上を見下ろす気にはなれない。そしてさいごは、おそろしいきけんがいっぱいなのだ。」

パエトンは聞こうとせず、お父さんの首にだきついて、行かせてくれとたのみました。

とうとうヘリオスは言いました。「どうしてもと言うなら、おろかな子よ、ねがいをかなえてやろう。わたしはやくそくをやぶれないからな。どうか、もっとかしこくえらんでおくれ。地上でも空でも、いちばん大切なものをたのめば、それをあげよう。」

もう夜明けが朝のむらさきのカーテンを引き、時の女神たちが車に馬をつないでいました。

星と月は、昼のあいだ休みに入ろうとしていました。

車はたから石でキラキラかがやき、四方八方へ光をはなっていました。パエトンはそれを見てうっとりし、車を走らせる大きなよろこびを、待ちきれないほど楽しみにしていました。

ヘリオスは言いました。「ああ、かわいいむすこよ、高く上がりすぎてはいけない。天のすまいをこがしてしまうから。ひくく下がりすぎてもいけない。世界に火をつけてしまうから。

「まん中の道を進みなさい。それがいちばんよいのだ。むちは使わず、むしろ馬をおさえるようにしなさい。」

パエトンはうれしすぎて、お父さんの言うことが耳に入りませんでした。

パエトンは金の車にとび乗り、火のような馬たちが昼の東の門からとび出していくと、まっすぐに立ちました。

馬たちはすぐに、主人の強くたしかな手がないことに気がつきました。

上へ、上へと、空高く、星よりも上へのぼり、それから地上めがけてまっさかさまにかけ下りました。

雲はけむりを上げ、山のてっぺんは火事になり、たくさんの川がかれて、国ぜんたいがさばくになってしまいました。

大きな町がもえ、海のポセイドンまでが、こわくてさけび声を上げました。

そのとき地上の人々は、太陽の通り道が、どんなにすばらしいちえで決められていたかを知ったのです。

ヘリオスは、まもなく世界中が火につつまれてしまうとわかり、父なるゼウスに、ほのおから地上を守ってくださいとさけびました。

ゼウスは天じゅうをさがして雲を集め、空からいなずまを投げつけました。

パエトンは車から落ちて、下へ、下へと、すんだ川へ落ちていきました。

水のようせいたちがパエトンのもえるようなひたいをひやし、やさしく歌ってねむらせました。

パエトンのお姉さんや妹たちが川の岸にやって来て、なきました。

いつもパエトンのそばにいられるようにと、ゼウスはかわいそうに思って、むすめたちをポプラの木にかえました。むすめたちのなみだは、水に落ちると、すき通ったこはくになりました。

やがて、つかれた馬たちはおとなしくなり、大きな車はゆっくりと、もとの道にもどっていきました。

けれども、さばくや、草木の生えない山のてっぺんは、パエトンが太陽の車を走らせようとした日のことを、今も語っているのです。

## たんご と クイズ パエトン

| | | |
|---|---|---|
| **chariot** （馬が引く）車 | **valley** 谷 | **icicles** つらら |
| **horses** 馬 | **deserts** さばく | **river** 川 |
| **poplar trees** ポプラの木 | **amber** こはく | |

**Q1** パエトンがお父さんにたのんだことは？

① 金のかんむりがほしい　② 一日だけ太陽の車を走らせたい　③ 空の宮でんにすみたい

**Q2** ヘリオスは、どの道を進むように言った？

① まん中の道　② いちばん高い道　③ いちばんひくい道

**Q3** パエトンのお姉さんや妹たちは、何にかえられた？

① 白鳥　② 星　③ ポプラの木

**こたえ**

Q1 ② パエトンは、たった一日でいいから太陽の金の車を走らせてほしいと、ずっと心でねがっていたのです。

Q2 ① 高すぎると天を、ひくすぎると世界をこがしてしまうので、まん中の道がいちばんよいと言いました。

Q3 ③ いつもパエトンのそばにいられるように、ゼウスがポプラの木にかえ、なみだはこはくになりました。

**原田英語の多読ベストジュニア**

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

**出典**　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。